

日本事情・日本文化を取り入れた日本語授業を考える

—国際交流基金教授法シリーズ『日本事情・日本文化を教える』より—

北村 武士（国際交流基金日本語国際センター専任講師）

0. 台湾での日本事情・文化を取り入れた日本語授業

私は今回の巡回研修会で台湾を訪問して、台湾には日本から予想以上にさまざまな分野で日本の情報が入ってきていることに驚きました。このような環境で、台湾の日本語学習者は幅広い日本の情報に接しており、日本に関する知識は台湾以外の国で勉強している日本語学習者に比べるとはるかに多く持っているわけです。このような学習者に日本語の授業の中で日本事情や日本文化を取り入れた授業を実践するのは、ある意味世界で最も難しい国だと言えるかもしれません。そこで今回の研修では、日本事情に関する知識も持っている学習者に対しても成立する授業の方法を皆さんと考えて行きたいと思いました。

国際交流基金では海外の日本語教師を対象に日本語教授法シリーズ（全14巻）の発行を順次行っていますが、2010年5月に第11巻『日本事情・日本文化を教える』を発行しました。この本では日本語の授業で日本事情や日本文化を取り入れる考え方や方法についてまとめています。今回の研修会は、この本に基づいて本の内容を紹介する目的で行いました。以下の文も上記の本に基づいて書いてあります。

1. 日本事情に関する学習者の興味

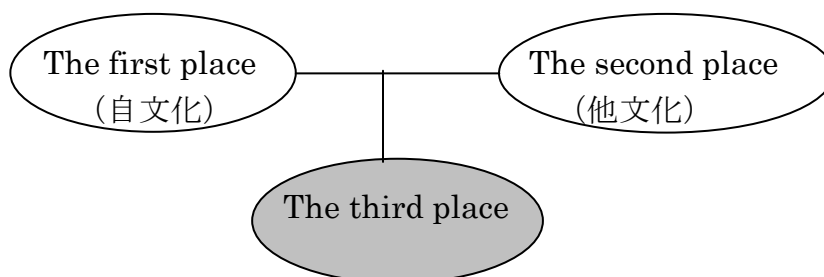
国際交流基金では2006年に『エリンが挑戦！日本語できます。』という番組を制作し、NHK教育テレビで放映されました（翌2007年に教材として出版）。この番組の制作に先立って海外の中等教育レベルの日本語学習者やその日本語教師に文化に関するレディネス・ニーズ調査を実施しました。その内容を簡単に紹介します。

「海外の教師が教えたいたいもの」は、「入手しやすい知識や情報から工夫して、アニメ、映画なども利用したい」と考えており、「(情報の少ない)学習者が知りたいもの」は「同年代の日本人の日常生活」に興味を持っているという結果でした。そして、「(情報を持っている)学習者が知りたいもの」は、「同年代の日本人の考え、悩み、心理や情報の背景となる歴史、技術、人間など」でした。このような興味や希望は情報の多い台湾の学習者にも当てはまることだと言えるでしょう。この興味は単なる現象的なものを知りたいというだけではないことから、授業ではそれらの背後にあるものを扱うことが必要だと感じさせるものです。

2. 日本事情や日本文化の扱いを考える

外国語教育の授業での文化などの扱いは、国によっても考え方が異なりますが、ここでは、オーストラリアとアメリカの例を見てみたいと思います。まず、オーストラリアで

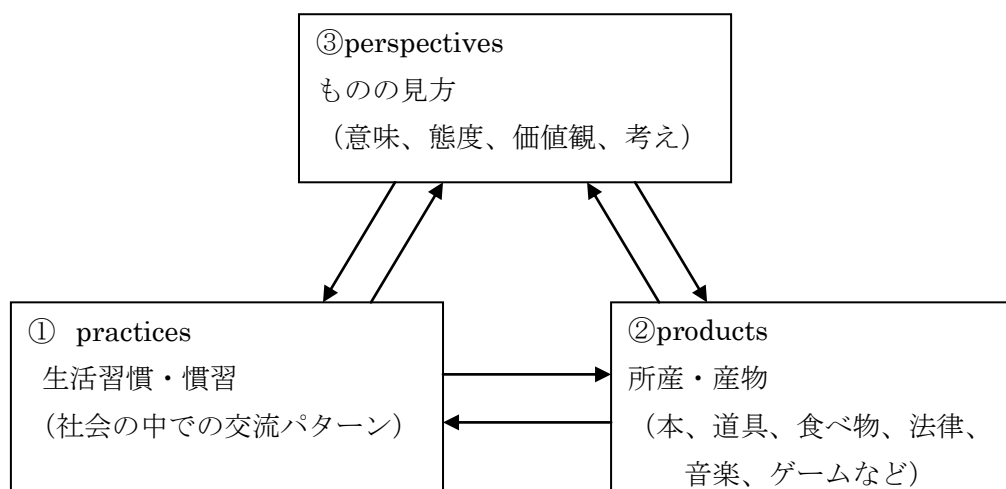
は相互理解の基礎を養うことが、異文化間言語教育の目的の1つとなっています。学習者が、自分の言語や文化に基づく“the first place”（第1地点）と、目標言語やその文化に基づく“the second place”（第2地点）を理解することによってその中間にある“the third place”（第3地点）で、自分のアイデンティティを維持しながら、他文化の人と円滑で快適なコミュニケーションができることを目指しています。



また、アメリカの例を見ると、21世紀における外国語教育の方向を示すものとして『21世紀の外国語学習スタンダードズ』（“Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century” 1999）を発行して、文化を次の図のように整理して考え、文化理解のための方法を提案しています。

ある文化には、(①)「人々の生活習慣や慣習 (practices)」があり、(②)「文化的所産・産物 (products)」があります。そして、それらはそれぞれその背後にある (③)「人々のものの見方や考え方、価値観などの背景 (perspectives)」と密接に関係しています。そのため、文化を理解する授業でも、まず目に見える①や②をじっくり観察したり、できれば実際にやってみたりすることが大切だと考えています。そして、そのことについて、分析したり討論したりして、背後にある③について理解することを目指しています。

3つのP



このように、オーストラリアやアメリカの外国語教育の文化の扱いは、個々の事物や習慣を学習者に教えるだけでなく、それらを理解したり考えたりすることによって、第三の場を考えたり、価値観や考え方を理解させようとしています。ここで大切なことは、学習者に自分で考えさせるという点です。こうすることによって、自分とは異なる多様な文化や考え方の存在に気づき、視野を広げることができるようになります。また自分や自分の文化をふり返ることもできるようになるでしょう。そして、学習者は将来、新しいものや自分と違うもの(文化)と接したときの姿勢を養うことができるようになります。この姿勢を養うことが、とても重要なポイントだと考えられます。

3. 授業の中で文化をどう扱うか

これまで一般的に行われてきた日本事情や日本文化を扱った授業では、それぞれの事象を学習者に分かりやすくまとめて、教師が教えるという形式です。これはいわば「知識伝達型」ともいえる授業です。個々の事象を伝えるということは「文化は変わらない固定したもの」という見方で、それぞれの知識を獲得することによって学習者は日本事情や日本文化に対応していけるようになるという考え方です。しかし、これは裏を返せば、習わなかった事象に関しては、知識を獲得していないので、その事象に接しても対応することが難しいということになります。当然日本事情や日本文化の幅は広く、その全てを教師が授業で扱うことは不可能です。

そこで先に例としてあげたオーストラリアやアメリカのように、学習者に考えさせることを通して、その背後にあるものを理解しようとする姿勢を育てることを参考に次のような授業スタイルも考えられます。それは、教師が学習者に個々の事象を知識として与えるのではなく、事象を提示して学習者自信がそれらを観察しながら自分で考えて、自分で対処する力を育てていくように指導する、という形式です。これはいわば「プロセス重視型」ともいえる授業で、学習者が未知の事象に出会っても自分で考えて対応する力をつけるのを目的とし、それと同時に比較することによって自分の文化についても再認識することができるわけです。

4. 授業の実際

先に提示した「プロセス重視型」の授業の具体例を以下に見ていきましょう。授業を計画する際、大切なことは先に触れたように「授業の中で、学習者が自分で考える機会を与える」という点です。単に知識を記憶させるだけで終わってしまったら、文化について考える姿勢は育ちません。

活動例1 初級の授業

Aさん、Bさん、Cさんの部屋にあるもの(つくえ・コンピュータ・テレビなど)をチェ

ックするシートを用意する。

そして、3人の高校生の部屋を紹介した映像（『エリンが挑戦！日本語できます。』の動画）を見せて、シートにチェックさせる。（学習者が成人の場合は、『日本語教師必携すぐに使える「レアリア・生教材」コレクション CD-ROMブック』の「部屋の映像」の動画などを使用）

その後、部屋にあったものを整理して、グループで話し合いながら今度は自分の部屋にあるものを紹介し、日本の高校生の部屋にあるもの、自国の生徒の部屋にあるものの違いや同じものなどについて話し合わせ、発表させる（日本語で話し合うのが難しい場合は、母語で話し合っても構いません）。この場合、違う点だけに注目するのではなく、共通点についても考えさせると、さらにはっきりと自国の特徴が見えてくるでしょう。

活動例2 文字の授業に取り入れる

文字を教えるときには、いろいろなレアリアを利用して文化を取り入れた授業ができます。例えば、日本の看板や店の名前の写真を利用して、カタカナを教えたり、読む練習をしたりしたあと、そのときに使った看板の写真から気づいたことをみんなで話し合う。これで日本のいろいろなお店を見ることができ、自分の国の商店との比較などから考えさせることができるでしょう。

写真から考えさせるのですから、教師が様々な商店の解説をするのではなく、学習者にどんな商店なのかを考えさせたり、なぜこのような店が必要なのかを考えさせたりするのが重要です。このとき正しい答えが生徒から出なくても、考えるトレーニングだと位置づけていろいろな答えを引き出すようにしましょう。

活動例3 初級後半の読解練習に取り入れる

日本の町にある店の説明をした3つの文章を与えて、それぞれがどの写真の店の説明かを考えさせる。

それぞれの店のサービスは客にとってどのようなサービスになっているか、どうしてそのようなサービスがあるのか、考えさせる。

活動例4 日本人のビジターを招く

- ①学習者の興味や日本語のレベルや授業で扱っている内容などを考慮して、ビジターセッションのテーマを決める。
- ②ビジターの背景（年齢、職業、日本を離れて何年ぐらいかなど）を調整する。
- ③事前に質問などを準備させると良い。一問一答にならないようにする。質問は日本人が受けたら、答えてから「台湾ではどうですか」と質問してもらうなど。
- ④ビジターの答えが日本人全ての考えではないことを、ビジター・学習者の双方に確認しておく。

- ⑤ ビジターには、事前に「分からないことは分からない、と言っても良い」「教師にならないように」などを頼んでおく。
- ⑥ 終わったら、ビジターにも感想を話してもらおう。
- ⑦ 後で、学習者は話し合った内容や感想をまとめて報告する。そのとき違う考えの人の意見を聞いたり、理由や背景を考えたりする。

活動例5 学習者自身に調べさせる

学習者が自分自身で興味を持ったことを調べて発表させます。

- ① 学習者をグループに分けて、関心のあるテーマから、調査研究を行うテーマを決めさせる。
- ② テーマは学習者の年齢や背景などに合わせて決めるとよい。例えば「お好み焼き」「日本の教育」「結婚問題」などなんでもよい。
- ③ 学習者が普段から使っているリソースを確認し、教師からもいくつかの材料を紹介してから、テーマについて調べさせる。
- ④ 調べたことをポスターやパワーポイントにまとめたり、報告したりさせる。
- ⑤ 報告内容を聞いて、クラスで自分の国との共通点や相違点とそれぞれの背景または自分の国と日本のつながりなどについて考えさせる。

5. 短い時間で「日本事情・日本文化」を扱うポイント

実際に授業の中で日本事情や日本文化を扱う場合、現場ではその活動に大きな時間をとるのが難しい場合がほとんどでしょう。短い時間で扱う場合でも注意したいことは、次のようなことが考えられます。

- ① 学習者が短い時間でも「自分で見る・発見する・考える機会」を作るようにする。
- ② 自分の国の習慣などと違う場合は、つい「違う」→「なんかいやだ」という発想になりがちだが、「嫌だ」ではなく、違いを肯定的に受け入れるようにする。
- ③ 異なる点だけではなく、共通点も大切に扱う。
- ④ 現れている現象の背景を思いやる。
- ⑤ 日本人や自分の国の人のイメージを一つに決めない。

などでしょう。

これらの活動を通して、自文化への内省や他の文化の理解を深めて、多文化への理解力を高めていくことを目指すのが、文化を授業で扱う目的の一つとして位置づけることができると考えられます。

6. 学習者が学んだことを確認(評価)する

海外で日本語(外国語)を学習する目的の一つは「自分とは違う文化があることに気づき、広い視野を持つこと」があるといえるでしょう。しかし、授業内容と、その目的がどれだけ達成されたかを測るための「評価」とが、きちんとつながっていなければ正しい評

価とは言えません。この考えに従うなら、従来の「学んだ知識や情報の量や正しく覚えているか」を測るテストと「プロセス重視型」の授業での評価方法とは形式が異なったものになってきます。すなわち「学習者が授業を通して、どのように考えるようになったか」を測ることができる内容であることが必要です。

6.1 ポートフォリオ

学習者が学習過程で作成したものと自己評価の記録、教師のアドバイスや評価などをファイルに集めて整理して、学習者の能力の発展が分かるようにするものを、ポートフォリオといいます。このポートフォリオは、最後の成果だけを保存するのではなく、コースの最初から最後まで、学習者がどのように考え、変化していったかが分かるように保存することが特徴です。学習過程で作成したものや評価基準の他には以下のようなものを保存します。

- ・振り返りシート①：授業を受ける前に持っていた知識や情報、イメージなどを記録させ、それが活動や授業でどのように増えたか、変わったかを学習者自身も教師も観察することができるシート。教師も内容を確認し、コメントをつけて返却し、それもファイルに保存していきます。

- ・振り返りシート②：コースや学期の終わりに、それまでファイルに保存した成果や記録をもう一度見て、その成長の様子を自分でシートに記入して保存します。自分でファイルを見るだけでなく、学習者同士で見せ合うのもよいでしょう。

これらによって、学習者は自分の考え方がどのように変化したり成長したりしたのかを自覚することができ、これからの授業を受ける姿勢を見直すことができるようになります。また、教師は学習者 1 人 1 人が学んだことや考えたことを知ることができ、今後の授業に生かすことができます。ポートフォリオの教師のコメントとしては、学習者がもっと関心を広げることができるようなヒントやアドバイスを書きます。

6.2 ルーブリック

ルーブリックとは、評価の基準となる「ものさし」のことです。この評価基準をポートフォリオのファイルの中に一緒に入れておくことによって、学習者にも到達目標を具体的に意識させることもできます。そのため、このルーブリックの評価基準はコースの目標や授業の方針、活動方法と合致していなければなりません。

この、ルーブリックをコースの最初や授業の前などに学習者にも見せて評価基準を意識して活動させたり、学習者自身も自己評価をしたりする使い方もできます。ルーブリックの具体例は参考文献の『日本事情・日本文化を教える』をご覧ください。

7.さいごに

今回はプロセス重視型のアプローチに重点を置いて紹介しましたが、これは知識伝達型

を完全に否定するものではありません。やはり日本事情を紹介する場合、知識として伝えて置くべきこともたくさんあるでしょう。そこで、台湾でこれまでに実践してきた日本事情を扱う授業活動に、今回のプロセス重視型の考えを加味してみることによって、授業の幅が広がりさらに豊かな日本事情理解教育につながるのではないかという考えで紹介しました。是非、皆さんもできる部分から取り入れてみていただきたいと思います。

参考文献

- 『日本事情・日本文化を教える』（日本語教授法シリーズ第11巻）国際交流基金(2010) ひつじ書房
- 『日本語教師必携すぐに使える「レアリア・生教材」アイデア帖』国際交流基金(2006) スリーエーネットワーク
- 『日本語教師必携すぐに使える「レアリア・生教材」コレクション CD-ROMブック』国際交流基金(2008) スリーエーネットワーク
- 『JF 日本語教育スタンダード 2010』国際交流基金(2010)
- 『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』国際交流基金(2010)
- 『中・上級日本語教科書 日本への招待』東京大学 AIKOM 日本語プログラム(2001) 東京大学出版会
- 『異文化トレーニング』八代京子他(1998) 三修社
- 「韓国中等教育機関への留学生ボランティア派遣プログラム実践報告—国際交流基金ソウル日本文化センターにおける日本語ネイティブ・ゲスト派遣の試み—」『国際交流基金日本語教育紀要』第6号 長田佳奈子他 2010年 国際交流基金
- 『21世紀の外国語学習スタンダード日本語版』国際交流基金
- National Statement for Languages Education in Australian Schools-National Plan for Languages Education in Australian Schools 2005-2008
- Intercultural Language Teaching and Learning in Practice
- National Standards foreign language Education Project(1999) *standards for Japanese language in the 21st Century*